

コリント I 11 章の女性のかぶり物についての考察

パウロが論じているクリスチャン女性の「かぶり物」(ヴェール)に関する記述は、非常に解りにくいと言われています。

これに付いての詳しい解説も多くはありませんし、あっても、どれもあまり当を得ていないように感じます。

たいていの説明は、『女は礼拝の時、神が定められた「男の権威」に対する認識を持っている事を現すものとして「かぶり物」が必要』。と言うようなものが一般的なようです。

しかし、文脈を注意深く読んで行きますと、単にそういう問題ではないことが解ります。

今回は、この点を考察したいと思います。

まず、ちょっと長いですが、適宜簡単なコメントを加えながらその部分を引用しておきましょう。(新共同訳より)

「11:3 ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。

序列が定められている— 神—キリスト—男—女 の順。

11:4 男はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶるなら、自分の頭を侮辱することになります。

「頭」[ギ語：ケファレ] (日本語では読み方が異なりますが、ほとんどの原語でカシラとアタマは同じ語です。

「侮辱する」[ギ語：カタイスクーノ (混乱、不名誉、恥)]

11:5 女はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります。それは、髪の毛をそり落としたのと同じだからです。

適用される場面は、祈りや預言をする時。当然これは、個人的なものではなく、公に、先頭に立って直接、霊的な事柄を行う場合、と言う事でしょう。

11:6 女が頭に物をかぶらないなら、髪の毛を切つてしまいなさい。女にとって髪の毛を切つたり、そり落としたりするのが恥ずかしいことなら、頭に物をかぶるべきです。

11:7 男は神の姿と栄光を映す者ですから、頭に物をかぶるべきではありません。しかし、女は男の栄光を映す者です。

男女の違い— 男は神の栄光の反映。 女は男の栄光の反映。

「栄光(えいこう)とは：輝かしいほまれ。大きな名誉。光栄。」

11:8 というのは、男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来たのだし、

11:9 男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。

11:10 だから、女は天使たちのために、頭に力の印をかぶるべきです。

「力の印」と訳されていますが、原文には「しるし」に相当する語句はありません。

単に [ギ語：エクソーシア (パワー、権威 [authority]、影響力、特権)] を頭に付けると

なっています。

11:11 いずれにせよ、主においては、男なしに女はなく、女なしに男はありません。

11:12 それは女が男から出たように、男も女から生まれ、また、すべてのものが神から出ているからです。

11:13 自分で判断しなさい。女が頭に何もかぶらないで神に祈るのが、ふさわしいかどうか。

11:14-15 男は長い髪が恥であるのに対し、女は長い髪が誉れとなることを、自然そのものがあなたがたに教えていないのでしょうか。長い髪は、かぶり物の代わりに女に与えられているのです。

「かぶり物」[ギ語：ペリポライオン（覆い、マント、ベール）]

11:16 この点について異論を唱えたい人がいるとしても、そのような習慣は、わたしたちにも神の教会にもありません。」(コリント I 11:3-15)

「かぶり物」と訳されている[ペリポライオン]は「覆い、マント、ベール」という意味があり、また、長い髪は「かぶり物」に匹敵するという表現から、頭にかぶるもの、つまり頭をすっぽり覆うもの、と言うイメージをパウロは持っていた事がうかがえます。

それで、ここで一つ、問題提起をしておきましょう。

つまりそれは、「かぶり物」の意味するものとは、頭を覆う、視界から遮蔽する目的のもの、隠すためのもの、もしくは、殊更に目につくように掲示、表明するものどちらなのでしょう。か？ という問題です。

最終的にこの記事の中で答えを出します。

さて 10 節の、「力、権威（のしるし）」とはどのようなものでしょうか。

権威の代行者（本来男子が行うべき事柄を、代行するために、一時的に権威のある者としての言動であることを明らかにするための）しるしでしょうか。それとも、権威を認めていることの認識を示すためのものでしょうか。

ここの記述が分かりにくい理由の一つは、頭[あたま]と頭[かしら]が同じ単語だからでしょう。3節の「男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神」という表現は、日本語で正しく読めば、男のかしらはキリスト、女のカシラは男・・・となるはずで

女性が「自分のあたま」と言えば、その女性の頭部を指しますが、「自分のかしら」と言ったら、それは「夫（男子）」を指すことになります。

日本語で仮名で表せば、区別がつかますが、「my head」では、どちらか解りません。

4節の「頭に物をかぶるなら、自分の頭を侮辱することになる。」という表現ですが、「男」が、頭部を覆うなら、「自分の頭」を侮辱する。この、後半の「頭」は明らかに自分自身の頭部のことではなくそれが象徴するものつまり「アタマではなくカシラ」を指していると考えべきでしょう。

原語では、「(冠詞のない) 頭 [ギ語 : ケファレ] head」の上に付けるなら [彼の (定冠詞のついた) 頭 [ギ語 : テン・ケファレ] [the head of him]] に恥を付ける。

という風になっていて、栄光を受けている部分を象徴する「頭」を覆うなら、その栄光を隠す、つまり、神の栄光を恥とする行為となると述べているようです。

実際、自分のあたまに覆いを付けると「自分のあたまを侮辱する」ことになってしまう、と言う事では、意味不明でしょう。

13 節の、「女が頭に何もかぶらないで神に祈るのが、ふさわしいかどうか。」というのは、つまり、神に対して相応しいかどうかということであり、単に自分の頭部を侮辱することが問題なのではなく、神 (かしら) に対する問題だということが解ります。

従って、「祈り、預言」という神の権威に関連した行動 (神権的な業 [theocratic work]) を行う際に、男子が自分の頭を覆うなら、かしらであられる神を侮辱することになる。ということです。

では、女性の場合はどうなるのでしょうか。

今度は全く逆で、あたまに覆いを付けないと、恥となるということです。

もしこれが、多くの解説で述べられているように、「かぶり物」が「権威に対する認識の表明」であるなら、男子もキリストの権威、神の権威を認めていることを示すために、かぶり物をかぶるべきということになります。

このことから、「かぶり物を付ける」ことが象徴しているのは、単に「権威を認めているしるし」ではあり得ない、とまず、結論が出るはずです。

では、女性だけが付けるべきとされる「かぶり物」の意味は何でしょうか？

この一連の記述を解りにくくさせている、もう一つの要因は、「権威の序列」と「栄光の反映」の区別がつきにくいいためかもしれません。

男女の違いを今一度おさらいすると、「権威の序列」においては、より上位の権威に対しては、個別ではなく包含されていることがわかります。

つまり、女の「かしら」は男で、男の「かしら」はキリストですから、当然、キリストは女に対して更なる権威を有するというのは言うまでもないことと考えられます。

そして、神は、キリスト、男、女、全てに対して権威を有しておられます。

これが、「権威」はその序列において包括的であるということです。

では、「栄光の反映」についても同様に言えるのでしょうか？

女は、(人間の) 男の栄光を反映する存在である、とするところの、「栄光の反映」は序列ではなく、上位に対して包含されると言うものではないと言う事です。

頭（ケファレ）に関しては、「女－男－キリスト－神」の4者が関係していますが、この「栄光の反映」に関しては、「女は男の栄光の反映、男は神の栄光の反映」であり、後者はキリストが関与していません。

「栄光の反映」と言うものがもし、包含されるものであるとすれば、「神の栄光を反映している男」の、その男の栄光を反映している「女」は、男を通して神の栄光を反映している事になります。もしそうであれば、「かぶり物」云々という論議する必要もなく、「男は神の栄光の反映」であると明言する程の意味をもたなくなるのではないのでしょうか。

むしろ、「栄光の反映」という観点だけから論じれば、「女」は飽くまで「男の栄光の反映」という存在であって、「神の栄光の反映」という存在ではない。と断言していると捉えるべきなのでしょう。

そして、その根拠としてパウロが挙げているのが「男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来たのだし、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだから」というものです。

これが、栄光の反映は権威の序列とは異なり、包含されず、むしろ、それぞれ個別の関係であるとする、わたしの考えの根拠です。

このことを踏まえて考慮すると、かぶり物についての男女、真逆のパウロの提言が、良く理解できるようになって来ると思います。

ここで、男女の違いを、二つのケースごとにまとめてみましょう。

<頭に何も付けない状態>

男：

そのままの状態、神の栄光を反映するものである故に、相応しく、神の権威に関連した業を行える。

女：

男の栄光を反映する存在である故に、そのままの状態、神権的な業を行うなら、人間（男）の栄光を現しながら、それを行うことになり、自分のカシラ（上位の権威を全て含む）を侮辱する事になる。

<頭にかぶり物を付けた状態>

男：

神の栄光を反映する存在である故に、頭を覆うなら、神の栄光を遮り、自分のカシラ（権威の源であられる神）を侮辱する事になる。

女：男の栄光を反映したものとしてではなく、敢えて権威（の印）を付けることにより、神の権威に対する相応しい認識を示すことになる。

女が、自分の頭部を覆わずに、神権的な業を行うと、なぜ、自分の権威の源を侮辱することになるのか、もう少し説明を加えておく必要があるかと思えます。

その場合、女は、本来男子が扱うべき業を、頭に何もかぶらずに行うなら、自分の「(女の) 頭」をさらけ出していることになり、自分自身を栄光の源とし、男の栄光を不要なもののみなしている故に、その行為は、自分の栄光の源であるはずの「男 or 夫」を侮辱する行為となる。ということなのです。

それで、「かぶり物」を付けず、自ら神の栄光を映したもののようには振る舞いたいのなら、「男と同じように髪の毛を切ってしまいなさい。」と述べているのでしょう。

このことを考えると、次の「み使いたちのため(のゆえに)」という言葉の意味が分かってきます。つまり、「祈りや預言」という神権的な業に関しては、常にみ使いたちの見守る所となり、彼らも、何らかの仕方で、それに協働する立場にいるからです。

聖書中の様々な記録を見るなら、み使いたちは理知を持つ被造物として、逐一具体的な指示命令がなければ、何もしない、ということではなく、神のご意志に適った事柄であれば、人の言動に呼応して、自ら行動するようです。

そのみ使いたちが、女性の行う「祈りや預言」を「人間」の男の栄光を反映して行うなら、それをどう感じるのだろうかということなのです。

男が、神の栄光を反映した(頭に何もかぶらない)状態で神の目的に関連した業を行うとき、み使いたちは、それを神の権威に基づくものとして受け止め、それに協力することができます。しかし、女が、人間の栄光を反映した(頭に何もかぶらない)状態で神の目的に関連した業を行うなら、み使いたちは、困惑することになるでしょう。

そこで、かぶり物はまず、一つの役割、つまり頭つまり男の栄光、すなわち「人間の栄光」を覆うことによって、これから行う「祈りや預言」といった神権的な業は、「人間の権威」から出たことではないということを示す必要があるということなのです。

言い換えれば、「男の栄光」をかぶり物で覆うことにより、栄光の源に関して、まずニュートラルな状態にすることになります。

そして、さらに、そのかぶり物(ベール)はみ使いたちにとって「エクソーション」(権威)そのものとなるということですから、これは、女である私の権威からでも、男の権威からでもなく、神からの権威に基づく行為だと言うことを、み使いたちの前に、意図的に、視覚的に明らかにすることによって、「神からの権威の代行」であることが明確になるということを示すというのが、パウロの意図するところであったと考えられます。

ところで、パウロは「かぶるべき」と断言しながら、その直後に「自分で判断しなさい」と述べています。結局どうすべきなのでしょう。

「かぶるべき」は命令です。クリスチャン女性にとっての規則となるものです。

しかし、「自分で判断」するよう促されていますので、「自分で判断」した結果、「必ずしもその必要はない」と思ったなら、それもまったくOKということになるのでしょうか。

また「女性の髪はかぶり物の代わりに女に（神から）与えられている。」とも述べています。それは言い換えれば、かぶり物が必要な場合でも、自前の長い髪で代用できる。ということと同じであろうと思えます。その際、そのことを当人がちゃんとそのような自覚と正しい認識を持っているなら、外面ではなく心をご覧になる神の前であって靈的に相応しい態度であると言える。という風にお考えになる方もおられるかも知れません。

恐らく、このパウロの陳述は、創造された当初の、本来の女性の髪に関する靈的な役割についての話なのでしょう。

つまり、罪が入る前の完全な人間男女として造られた時は、頭を覆うものどころか、衣服さえ必要のないものとして、何ら恥じることも、やましい思いもなく神の前に立つことのできる存在でした。

ですから、このパウロ言う「髪はかぶり物の代わり」というのは、「自然そのものが教えている」ことだと付け加えることによって、パウロは、神の創造の意図の中に「女性の髪」については物理的に、男の栄光を反映するものと言う役割（意味づけ）があった故に、「かぶり物」というのは、創造の設計に裏付けられたものなのだという事を示したかったのであると思います。

さて、さらにパウロの論議は、終盤になってバランスをとっています。

パウロはここで、ある人々が誤解することがないように、「ことわり」を付け加えています。

これは男尊女卑でもなければ、不当な差別などではない事を説明します。

これは、権威の序列、神の秩序の取り決めであって、人間としての優劣では決して無いことを付け加えています。

言葉を換えれば、差別ではないが、区別はあるということです。

この自分の意見に「異論が出る」であろうことを予期していますが、聖書的な絶対的な根拠によって論破するのではなく、最終的には、その判断は「習慣」に習うということで論議を終えています。

ということは、「習慣」が時代と共に、或いは地域によって、異なって来るなら、その判断も変わってくることもあり得るわけですから、それによる判断の余地を残していると言っても良いと思います。

これが、ともかく「神の定め」であるなら、問答無用で、聖書の根拠を示して、「かぶるべきです」と述べた10節で、この件を打ち切っても良かったはずですが。

この微妙な展開は、パウロの手紙の一つの特徴的なものと言えらると思いますが、ここでも明らかに、話しを進める内に考えの進展が起きていることが読み取れます。

この記述は、コリントの会衆に送られた手紙であり、決して生放送で口頭で語られたものではありませんから、最終的に文章を編集して、すっきりまとめられた結論だけを書き送れたはず

です。しかし、恐らく、あえてそうはせず、考えるままに記された表現にパウロの生々しい、思いや感情がうかがえます。

恐らくパウロの思いは、「混乱させる」要素はできる限り排除し、整然と秩序正しく、平和裏にクリスチャン生活や会衆での神への崇拜を続けてゆくようにというのが、その根底の願いであつたらうと思ひます。



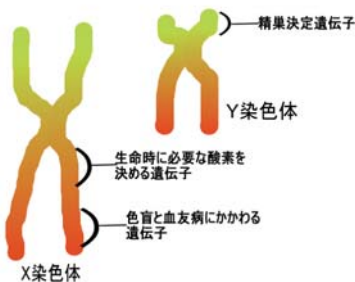
補足資料 及び おまけ

女が男から出ているー

「男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来た」(11:8)

「卵が先かニワトリが先か」という問がありますが、「男が先か女が先か」という質問を提起するなら、生物学的には「男が先」ということになります。

人間の場合、男性の染色体構成は、その形状からXYであり、女性はXXです。(性染色体(せいせんしよくたい)とは、雌雄異体の生物で性決定に関与する染色体)



男性の染色体はどちらも持ち合わせていますから、単体で雌雄どちらを産み出すことも理屈としては可能ですが、女性はXXしかなく、Yが欠落しており、従つて単体で男性を生みだすことはできません。

従つて、人類創世に関する聖書の記述である、「最初に男性が造られ、その一部から女性を創造された」という記述は、今日の生物学的知識から見ても、理にかなっていません。

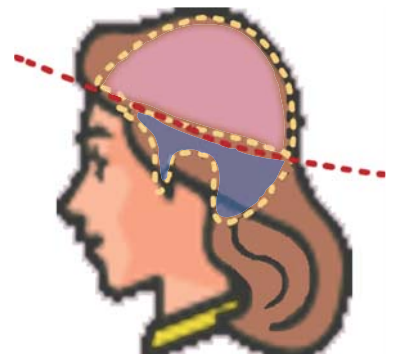
「自然そのものが教えている」

「長い髪は、かぶり物の代わりに女に与えられている。」(11:8)

頭の上(右図 / 赤点線以上)は女性ホルモンの影響を受け生えていて、下部は男性ホルモンの影響を受けて生えています。

男性はハゲても下部の髪は残っているのは、その部分が男性ホルモンで生える髪だからなのです。

「エストロジェン」(女性ホルモン)は頭髪が成長し続ける期間を長くする作用があり、男性の頭髪成長期よりも、女性の方が時間的に長いため、女性は腰のあたりまで髪が伸びます。



「日本に見られる、かぶり物」

日本の古い習慣には、イスラエルの習慣に良く似たものが少なくありませんが、「かぶり物」について色々と考えている内に、その概念が何となく似ているところがあるように思えたのが、「角隠し」です。上の論議とは直接関係ありませんが、興味深いと思ったので、「おまけ」として乗せてみました。



〔角隠し（つのかくし）は、和式の婚礼の儀において、頭を覆う形で被る帯状・幅広の布を言う。〕

角隠しの由来は、女性が嫁入りするにあたって、対抗心を象徴する角を隠すことで、従順でしとやかな妻となることを示す。〕

また、かつて女は嫉妬に狂うと鬼なると言われていたため、鬼になることを防ぐためのものなどと言われています。

古来から「頭角を現す」という言葉があります。

『「頭角」は「頭の方」「獣の角」のこと。〕

獣の群れの中で、頭の方角が他のものより抜きんでて、ひときわ目立つ意味から生まれた語』

才能・技量などが、周囲の人よりも一段とすぐれている。本来の持ち前を発揮し始める、などの意味で用いられます。

また、ある辞書の説明の一つに次のような解説もありました。

〔つのかくし〕：動物の角は一種の権威の象徴であり、力の象徴でもある。

兜や冠に角を飾れば、霊力があって、それをかぶった者の力は倍加すると信じられていた。〕

自分の才能や技量は多いに発揮すべきで、それは女性でも全く同じです。

しかし、その発揮の仕方は人によって様々です。

クリスチャン女性であるなら、対抗心を露わにしたような仕方ではなく、秩序を保った、もの柔らかな仕方で、言わば、「角隠し」を付けて、相応しく「頭角を現す」なら、全ての人にとって祝福となることでしょう。